



海外渡航自由化 50年シリーズ・第5弾

幾多の苦難を乗り越え成田空港が開港 需要急増に対応し海旅市場の拡大に貢献

渡航自由化から10年以上が経過した1970年代半ば、急増する航空需要は既存空港の処理能力を上回るまでになり、拡大する海外旅行市場の成長を支える新空港として、新東京国際空港が1978年5月に開港しました。幾多の苦難を乗り越えて誕生した成田空港は、“地域との共生”を通じて「テンミリオン計画」の実現にも大きく貢献していくことになります。

<増加する航空需要に対応>

第2次池田内閣の綾部健太郎運輸大臣が航空審議会に対して「新東京国際空港の候補地およびその規模」について諮問したのは、渡航自由化の前年に当たる1963年8月のことでした。1966年6月には、当時の佐藤栄作総理大臣自らが千葉県知事に対し、成田市三里塚に新空港を建設することについて協力を要請。同県は、住民対策に関する要望を政府に申し入れ、双方での合意を経て、千葉県知事が正式に三里塚案を了承しました。



開港当時の成田空港 (NAA 提供)

1958年に運輸省に入省し、1991年から1993年まで運輸事務次官も務めた新東京国際空港公団・元総裁の中村徹氏は、「1967年に赴任先の米国から日本へ戻り、成田問題に取り組むことになったが、当時は、航空市場の需給論から新空港の必要性に対する認識が一般に共有されるまでには至っておらず、もっぱら『成田闘争』という視点からの関心に偏っていたと記憶している」と語っています。

しかし、1970年代に入ると日本発着の航空需要が羽田空港の処理能力を上回るようになり、着陸時の上空待機や離陸時の遅延などが日常化。運輸省は1970年8月、羽田空港の1日当たり発着回数の限度を480回に設定しました。1972年6月に航空局監理部国際課長となった中村氏は、「空港のキャパシティが限界を超えてしまい、早く成田に空港ができないと大変なことになると思いながら、連日、スロットの調整に苦労していた」と振り返っています。

<発展支えた「地域との共生」>

政府や新東京国際空港公団をはじめ、成田市などの地元自治体や航空会社、関連企業、用地提供者など多くの関係者が待ち望んでいた成田空港の開港は、1978年5月20日ようやく実現しました。午前10時から旅客ターミナル北ウイング出発ロビーで開港式典が行われ、当時の福永健司運輸大臣は「難産の子ほど健やかに育つ」と挨拶し、成田空港への期待を示しました。

その福永大臣の言葉通り、開港初年度の1978年度に392万人だった国際線の日本人旅客数は、5年後の1983年度には500万人を突破。さらに、1980年代半ばからの円高を背景に海外旅行市場も急速に拡大し、成田空港の国際線日本人旅客数も、1987年度に前年度の675万人から869万人へ増加した後、1988年度には一気に1082万人に達して、あっさりと1000万人台を突破しています。

運輸省は1987年9月、「海外旅行倍增計画（テンミリオン計画）」を策定し、海外における安全対策や

長期休暇取得運動の充実を図る施策を展開すると、日本人海外旅行者数も 1990 年には 1000 万人に到達しました。

1987 年 6 月に国際・運輸観光局長に就任し、テンミリオン計画策定の陣頭指揮に立った中村氏は、「海外渡航が自由化された 1964 年当時、サンフランシスコの観光宣伝事務所に勤務していたが、日本人の年間海外渡航者数が 1000 万人を超えることなど想像すらしなかった」と述懐する一方、「内陸空港として困難な状況を抱えていた成田空港が、すさまじいばかりの右肩上がりの成長を続けた海外旅行需要を支えられた背景には、『地域との共生』という地道な努力があったことを忘れてはならない」と強調しています。

フリータイム型の新商品“ZERO”登場

成田空港が開港する 3 カ月前の 1978 年 2 月、旅行開発（現・ジャルパック）は新しいタイプの海外旅行商品として“ZERO”を発表しました。

渡航自由化から 10 年以上が経過し、海外旅行慣れしてきた若者に向けて発表されたフリータイム型の画期的な商品は、語学力の向上や情報網の発達などにより「ジャルパック離れ」の傾向を見せ始めた行動派の若年層を対象に、「自分のことは自分です」という斬新な考え方を提示したものでした。設定方面は、北米が 60%、ヨーロッパが 30%、グラム・オセアニアが 10%で、若年層に人気の高いアメリカが中心でした。

他の旅行会社も類似のツアーを相次いで発売し、いわゆる「DIY 市場」への取り組みが進められ、その後の FIT 市場の広がりにも先鞭をつける形となりました。

（参考資料『JALPAK グラフィティ 25 [旅行開発株式会社 20 年史]』）

日本人出国者数が年間 400 万人を突破

成田空港が開港した翌年の 1979 年、日本人出国者数が 403 万 8298 人（前年比 14.6%増）を記録し、渡航自由化から 15 年目で初めて 400 万人の大台を突破しました。

日本人出国者数は、1973 年に前年の 139 万 2045 人から一気に前年比 64.4%増の 228 万 8966 人に急増したものの、1973 年 10 月に第 4 次中東戦争が勃発したことによる第 1 次石油危機の発生などの影響を受け、1974 年には 233 万 5530 人とどまって伸び率も前年比 2.0%増まで低下、翌 1975 年も同 5.6%増の 246 万 6326 人と低迷が続きました。

しかし、1976 年に同 15.6%増の 285 万 2584 人まで回復すると、1977 年には同 10.5%増の 315 万 1431 人、1978 年も同 11.9%増の 352 万 5110 人を記録しています。成田空港の開港は、こうした海外旅行市場の急速な拡大にも対応するもので、400 万人台を突破した 1979 年まで 4 年連続で日本人出国者数は前年比 2 桁台の伸びを維持しました。

しかし、1978 年秋のイラン革命に伴うイランによる石油輸出全面禁止を契機とする第 2 次石油危機の影響により、1980 年の日本人出国者数は前年比 3.2%減とマイナスに転じ、渡航自由化から 16 年目にして初めてマイナス成長を強いられる結果となります。

（参考資料『法務省・出入国管理統計』）



2014 年は海外渡航自由化 50 周年となります。

1964 年 4 月 1 日に留学や商談など目的を持たない「観光」を目的としたパスポートが発行され、日本人の海外渡航が自由化されました。

お問い合わせ先

渡航自由化関連 URL : <http://www.jata-net.or.jp/voyage/>

一般社団法人日本旅行業協会

広報室

勢子・永由・佐藤

TEL : 03-3592-1244